

◆三日目・四日目

自室の寝台で、アートウナはうつ伏せになっていた。横の洞窓から祭りの拍子が聞こえる。枕の下に通す腕が冷たい。

寝台の下で、エラドルスが身じろぎをし、鱗がこすれる堅い音がした。顔を横に向けると、血の色をした毛足の長い絨毯が見えた。まるで沼のよう。ずっと見ていると、沈んでいくような気がする。

一日目の終わりに誰もいない魔導師の木へ帰ってきたのが、憂鬱のはじまりだった。

ノウアがいなかった。エイリアルレル城だと、アリアとアートウナの二人はすぐに悟った。それからしばらくして、狩の村から伝令がやってきて、アリアを呼んだ。エンバーウナ「へ夢炎」という魔法動物が、とある家のアベド全員を無気力状態にしたというのだ。

エンバーウナ「へ夢炎」は、過去の楽しい出来事を思い出させて、ひどく感傷的な気持ちにさせるのよ。祭りを楽しんでいる場合ではなくなるわ。思い出は、再度実現しないということに、打ちのめされてしまっているからね」

彼らはそうして、生活力をなくしていくのだという。エンバーウナ「へ夢炎」は、そんなアベドを捕食するのだ。多食であるため、一家全員を襲うことが多い。そして、味を占めたエンバーウナ「へ夢炎」は、何度も同じような場所を襲うのだそうだ。

「以前も対処したんだけどね」

アリアはそう言って、伝令とともに狩の村へ飛んで行った。彼女はアートウ

ナも誘ったが、アートウナよりも気が進まなさそうだった。

「あたし、やることがあるから」

アートウナは突き放すように言って、アリアを送り出した。板挟みになって苦しんでいるのが、アリアの紫の目を見てわかったからだ。いまの彼女にとって、アートウナという存在はお荷物だった。焦り、いらだち、そこから生じる自責の嵐が、アリアを取り巻いていた。

だから、アートウナの言葉は、彼女を救った。アリアは少し安堵して頷き、シャーナに乗った。

アートウナは、一人、魔導師の木に取り残された。自分にも仕事があるのは事実だった。つながりの扉での番人探しだ。

祭りの二日目と三日目を、彼女はつながりの扉で過ごした。地下の廊下は、太陽が力を発揮する外とは違い、ひんやりと過ごしやすかった。しかし、番人はいっこうに現れなかった。霧で霞む灰の草原や、寒々しい夜風が吹く崖、演劇の終わった祭り会場など、どこかうら悲しい世界が続いた。小鳩や、豆犬と呼ばれる兎ほどの小型犬が、狭い小屋に閉じ込められている世界もあった。大きくつぶらな瞳が、埃まみれの顔の中で光っていた。

アウシザットゥ

四日目に、彼女は図書室へ向かい、実文字の勉強をした。魔導師の木の図書室は、アートウナの部屋から五つ階段を上った先にある。床からはクルミの木が生えており、枝を横に伸ばし、隣の木と絡まって書棚を作っていた。天井は葉で覆われ、大昔に魔導師によって捕獲された〈風の川〉リンホローが、いまや住人となつて、ときおり吹き抜けていた。

もしかしたら、ノウアやアリアは気づいているのかもしれない、アートウナは最近思い始めていた。魔導師をやめようともがいていることを、彼女たち

は薄々知っているのだ。彼女たちは、そして、引き留めることを選んでいないようだった。一步退いて、アートウナがどちらを選ぶか窺っているような、奇妙な距離を、アートウナ自身は感じていた。

優しさによる無関心だろうか。それとも、もう諦めているのだろうか……。

アウシザツトウ

実文字の一つ、「オーシュト」は、円を描いて、横へ腕を伸ばすように一本線を書くことで表す。「望む」という意味の「オーシュト」は、なにかを得るために必死に手を伸ばしているかのようなうだ。アートウナは、練習用石板に書いてみたが、次に続く名詞は、いまのところ空白だった。

アウシザツトウ

実文字を学ぶためにここへ来たのは、気休めでしかなかった。空白を埋めるための気休め。しかし、どうにも当てはまらない。

リンホロアー

エラドルスが〈風の川〉に乗って、天井を優雅に飛行している。羽ばたきもせず、ゆつたりと。

アートウナは、「オーシュト」の隣に、小さく「代わりの者」と書いた。

◆五日目・六日目

ナウク

見習い頭脳大会は、南鶴学舎近くの野外劇場跡で行われた。主催者は師の長オルサンで、クワーレンたちは、積み上げられた丸太の観客席に座って、開会の言葉を聞いた。

アヤリ

「師の主、〈賢〉のもと、そなたたちの実力を試そう。エイネーアベドとして

の知力を、この場でとくと披露したまえ！」

観客たちは拍手を送った。観客には、見習いの他、師の人も集まっていた。回答者のうち上位七人には、アスハリエティク国留学の権利が与えられるというので、師の人たちは、前途有望な見習いをこの目で見にきたようだった。

舞台跡の前には、学舎から運ばれた机と椅子が並んでおり、各学舎の成績優秀者が毅然と座っていた。問題は口頭で出され、挙手による素早い回答が求められた。会場は大声厳禁だ。マウリンは落ち着かなげにこそこそ話し、岩羊競争での打撲に痛むチャルーは、体勢を変えることに呻き声を上げた。

「着火の際に用いられる薬液の名前は、なにか。その薬液を構成する物質もあわせて答えよ」

「狩りの村で起こった狩りの大飢饉は、何年のことで、誰が解決策に乗り出したか？」

「アスハリエティク国からの輸入物で、一番多いものはなにか。次から選べ。」

一、陽の瞳。二、灯火蟬。^{ナツクイカ}三、綿」

「前述の国の魔法使い、通称星狩る者のことを、その国の言葉で答えよ」

イムサは次々と正解を獲得した。オクルも同様で、彼らの番地仲間は、手の頭の後ろに当て、ぽかんとした。

しかし、残りが二十人ほどになったところで、長が手を上げて場を制した。

少し前から、師の人たちがせわしなく長のところへ耳打ちしていた。

「いまここで、非常に重要な知らせがある。本来ならば大会前に述べておくことだったのだが、我々の読みが誤っていた。我々は、このアスハリエティク留学を、四年生から六年生を見積もっていた。しかし、こんなに若い見習いたちがここまで残ってくれるとは、思ってもみなかったのだ。そこで、いま残っている者のうち、学年が上の者から、七人を選んでいく。三年生以下の者は、ま

だ枠がありしだい、選抜に入れることにする」

反論の聲が上がった。二年の少年が一人、さっさと退場した。

「無論、退場者は認めよう。こちらの誤りで起こったことなのだから。だが、留学の年齢を下げられないのは、安全上の理由だからだ。航海の道のりは険しい。よって、十五の歳になった四年生からを迎えるのだ。もし、今回枠に入った三年生以下の者がいた場合、その者は、四年になった時、アスハリエティクへ留学となる。これを踏まえたうえで、残りを続けるか否かの判断は、君たちにゆだねよう」

見習いたちは息をつめた。二人が退場したが、残りは継続を希望した。イムサとオクルも同様で、身じろぎ一つしなかった。

「残りは、六年から四年が十二人、三年から一年が六人よ。上級生が全員脱落しない限り、一年は枠に入れないわ」

リリは膝に頬杖をついて、悔しそうに言った。

「負け戦なのに、なんで続ける？」ガルシュが諦めた笑いを漏らした。

やがてすべての問いが終わり、結果が発表されると、リリのいう通り、低学年の見習いは一人も枠に入っていなかった。

だが、大会の後、オクルは言った。

「負け戦？ それは見方によるだろう。僕は、僕らを予測していなかった師の人に敗北があると思うね。相手の動きを読めていなかったんだ。戦では敗北だろ？」

イムサも、これに笑みを浮かべた。「違うない」

師の人が何人か、二人の名前を聞きに来た。影の人があなたたちを師の人に迎えたとき、顔見知りでいたい、と言った。

「このまま努力し続ければ、^{アヤリ}〈賢〉も影の人も、あなたたちを師の人に導くわ。

エイネーのために、頑張つてね」

彼らはそう言つて去つていった。

六日目に、3015番地の見習いたちはそろつて商の村へむかった。一日中菓子をほおばり、演奏に手を叩き、劇を見て、野原で昼寝をし、踊りに明け暮れるのは、気が変になるほど楽しかった。

日が傾きはじめても、まだ彼らは商の村の通りを練り歩いていた。

「明日で最後だなんて！」

マウリンが棒付き飴をぐだぐだ舐めて言った。「ずっとこれでいいのに。学舎なし、勉強なし、おかし食べ放題。どうしてそうならないんだろう？」

「みんな勘定ができず菓子が食えなくなる、素敵な世界になるからだよ」新しく買った本を大事に抱えるイムサは言った。

店の屋根から覗く夕陽が、商の村の紐飾りを燃えるような赤に染めた。通りを行き交うアベドの熱気が、すれ違いざまに当たる腕や肩から伝わり、わずかに残る透明な青空が、高く伸びる雲を運んできていた。

クワーレンは、ミル硬貨を隠しの中でざつと数えた。なかよしお日様味の収入を三等分して得た小遣いだ。特別賞の祝いと怪我の見舞いをかねて、チャル―に芋糸（干し芋にざらめをまぶした菓子）をねだられて買ったが、まだいくらか残っていた。

芋糸をくちやくちや噛みながら駄菓子屋に入つていったチャル―をよそに、クワーレンは広場の出店へ向かった。それは、観葉植物と小動物を売る珍しい店だった。手のような葉や、物差しのようにまっすぐな木の苗、下ろした髪のように揺れる蔦など、何十種類もの植物が溢れており、その中で、小動物のいる檻が木の実のように釣り下がっている。丸々とした鳩、六つの足を持つ白い

毛皮の雪鼠^{テイルキ}、羽のくすんだシェイスパールトに、ころころと太った豆犬。他に

も、手の平ほどの黒い鳥や、耳の長い小型の有蹄類、よく喚く桃色の猿など、名前の知らない生きものもいる。

ミル硬貨は、彼らを購入するにはまったく足りなかった。クワーレンは、黒い鳥の檻に指を近づけた。

「噛まないけどね、注意しなよ？」

緑の世界から女店主の顔がのぞいた。鼻の横に大きなほくろがある。頭を色褪せた赤い布で覆い、白髪交じりのくせ毛が首元から雲のように湧き上がっていた。「鴉は利口だから、あんたのことはすぐに見抜くよ」

「鴉？ 小さいね」

「南の国の鴉、シフゼツフ砂鴉だからね。北の鴉はもっと大きい。特に、デイゴンネー北部の鴉は最大と聞いているよ」

「どれくらい？」

「あんたを十人丸呑みできるくらいさ」

にこにこ笑う店主から後ずさりし、クワーレンは立ち去った。そこへ怒号が耳に刺さった。次に、「あぶないっ！」とリリの素っ頓狂な声が飛び、腕がもがれそうなほど引つ張られた。

把握できたのは、目の前を、馬車が黒い影となって通り過ぎたことだった。クワーレンはぎよっとした。こちらを向く御者と目が合ったのだ。そのあと、世界が真っ暗になった。

（目が見えない！）

どんなに目を凝らそうと、光が入ってこなかった。胃が痛み、息が吸えない。同時に、アバルバン谷の記憶が蘇った。

呪縛を解いたのは、鼓膜が破れるほどの騒音だった。溢れる光と色に、クワーレンは後ろに倒れかけた。誰かが支えてくれた。見上げると、リリだった。

遠くのなにかを見ている。

広場を突きつた馬車は、果物屋の屋台に衝突したらしい。悲鳴と罵倒が渦巻いており、何人かが事故現場に駆けつけていた。屋台の店主は危ういところで事故から免れたようで、傍で腰を抜き、崩れた果物の山と、まだ回転している馬車の車輪を見つめていた。

「い、い、い、今の見た？」

クワーレンが言うと、リリはようやく彼に焦点を合わせた。

「あんた、轢かれるところだったよ」

というより、馬車はあんたをめがけて走っていたようだけど、とは、リリも言わなかった。恐ろしくて口にも出せなかった。

クワーレンも恐怖に掴まっていた。しかし、彼は衝動に駆られるように、アベドをかき分けた。

「どこ行くの！」

「御者台に乗ってたあいつ、おかしかったよ！」

馬車へ向かいながら、竜人スエデンが言ったことはこれかもしれないと、クワーレンは思った。いまだ回り続ける車輪は、眠りのアベドの殺意を教えているようだ。腹の底から震えが駆けあがった。

野次馬の数が増えていく。何人かの男たちが馬車をひっくり返そうとする。御者を助けるつもりらしい。どこかで女が悲鳴をあげた。

「もう行こう！」

リリは顔をそむけ、クワーレンを引っ張った。クワーレンはよろけたが、男たちの言葉をはっきり聞いた。

「誰もいないぞ！」

クワーレンは、ぱっと彼女から離れた。

「ちよつと！」

「誰もいないなんてありえない！ あいつは絶対乗っていた！」

集団をかき分け、クワーレンはアベドの隙間から馬車をのぞいた。御者台は見事につぶれており、衝突された家の壁は、まるで爆発が起こったように黒く焦げていた。

「自分で転がって来たのか？」一人の男が言った。

誰かが「違う！」と喚いた。果物屋の店主だ。彼は尻もちをついたまま、立ち上がれない様子だった。震えて馬車を指さす。

「ううう、馬がいねえ！ 嫌なくらいでかい馬が布みたいに広がって、こつちに走って来たんだ！ おそろしい目をひん剥いて。それに、御者が乗っていた。あいつらがいないなんておかしい！」

たしかに馬がいらない、と何人かが頷いた。その中には、「俺も見た」と言う者もいた。だから、事態は余計こじれた。

「そんなでかい馬なら、逃げたらすぐに分かるだろう」

「この壁の焦げ跡はなんだ？」

「馬も御者も、あんたの幻覚じゃないか？」

野次馬は、次々に質問をした。だが、店主は、「分からない……まったく見えなくなつて……」と、卒倒した。

「ここにいたのかつ。大事件だな！」

チャルーがやって来た。他のみんなも一緒だ。彼らは事故の跡を見ると、しばらく言葉を失った。大輪の花のように咲く壁の焦げ跡は、クワーレンを震えさせた。

「魔法動物かもよ」

マウリンがイムサとそう話していた。

「馬に化けて、爆発する魔法動物か？ そんな魔法動物、聞いたことないぞ」

「新種かもよ？ 見えない死を起こしたやつみたいにさ！」

「かもな」

珍しくイムサがマウリンに同意した。

クワーレンの膝が震えだした。「もう、い……、行こう」

彼らは、静かにその場から背を向けた。

「大丈夫だった？ リリがすっ飛んで行ったと思ったら、クワーレンを引き倒して、馬車がばーんって！」

マウリンがクワーレンに言ったが、クワーレンは返事をする気力もなかった。まだ死んでいない。自分も、眠りのアベドも。やつが死んだ証拠はどこにもないのだ。

祭りのざわめきが遠く聞こえる。踊る気も、食べる気も失せた。家に帰って、寝台の下に引っ込んでいたい……。クワーレンは、やがて駆け足になって、焦げた花から離れた。

◆七日目 最終日

早朝から、アートウナは魔導師の木の一階にある物置で、探し物をさせられていた。

「あったかね？」ノウアが部屋を覗いてきた。

「ない」

「本当か？ あれを去年しまったのはあんただろうに」ノウアは、散らかった

物を跨いで入った。

「違うよ。ノウアが最後にしまったんだよ！ あたし見たもん」アートウナはノウアの口調をまねて言った。

「ほうら、あった」

ノウアは、木箱の中から、また小さな木箱を取り出した。青紫の粉が入った小瓶が並んでいる。

「あたしはここに入れた覚えはない」

「じゃ、あたしか？ まったく、いろいろ覚えていられないよ。あんたの方が若いんだから、覚えておいてくれないもんかね」

「ノウアがしまったことは覚えていたでしょ」

アートウナは、青紫の粉の瓶を見つめた。主の舞のとき、踊り手に施す顔料だ。水で溶かし、主を模した模様を描くのだ。

「ねえ、ノウア。これ、端がほつれているんだけど」

アリイアが紫色の布を持って来た。ノウアは、「どれ？」といって、立ち上がった。

「アートウナ、それを持って居間にきておくれ。まだやることがあるからね」
終わったら逃げ出そうと考えていたアートウナは、どきつとした。

「なにをするの」

「衣装がそろっているか確かめる。あと、傷んでいるものがあったら直さない
と」

ノウアは、アリイアの背を押した。アートウナは、渋々ついて行った。

最終日になって、魔導師三人は、久しぶりに魔導師の木に揃っていた。アートウナは、毎年恒例である主の舞の準備が嫌だったが、それでも、全員が揃うのはこの伝統のおかげでもあるので、認めたくはないが、感謝はしていた。

居間に上がると、食事台の上に衣装道具が並んでいた。銀の腕輪、腰や足に巻く黒い皮紐、紫の胴着とルドラ。それと、黒光りするひし形の仮面。仮面には、八本まつげの一つ目がくつきりと描かれている。これらは、魔導師の主、

グイメンノ
〈魔〉を表していた。

グイメンノ
〈魔〉は『エイネー叙事詩』において、島に上陸したエイネンナムのもとに現れる、最後の主だった。それまで島に無関心だったグイメンノ
〈魔〉だったが、次々と支配下に置かれる七匹の主を見てエイネンナムに興味を抱いたのがきっかけだった。

エイネンナムの黄金期は、生命の混沌とも呼ばれており、〈現〉におけるすべての生きものが爆発的に増えていた。魔法学的な解釈としては、エイネンナムの強大な魔力により、魔法動物たちが島から撤退し、〈現〉の生物を捕食しなくなったから、と言われている。加えて、アベド達が劇的な速さで高度な文明を築き、耕作や畜産をはじめたことも要因した。

そんなことで、エイネーの国力および島の生命力は増大していったのだが、

グイメンノ
〈魔〉は、これに最後の仕上げをした。それは、エイネンナムの死だった。

グイメンノ
〈魔〉は、長寿のエイネンナムに死を与えたことにより、生命の循環をあるべき姿に蘇らせたのだ。魔法動物はエイネーに再び飛来し、〈現〉の生き物を捕食した。生存競争にさらされた生物たちは、進化を求められた。アベド達は、救済のために主たちをさらに求め、自らの能力や知恵を向上させていった。

グイメンノ
〈魔〉は魔力を司る魔法動物と言われているが、こういったことで、〈内世界〉と〈現〉の均衡を守っている、高知能な存在とも言われている。どちらにせよ、グイメンノ
〈魔〉はエイネンナムの死以降、アベドの前に姿を現したことは一

度もなく、自分より強い有魔力者を刈り取る気まぐれ屋、とも言われていた。

ガイメン

「へ魔」が清潔な衣服を身に着けているとは考えられないが、舞い手には綺麗でいてもらいたいからね。ほつれを直して、術で染めなおそう」

アリイアが持ってきた布を広げ、ノウアは言った。それから、銀の腕輪に目をとめた。

「この腕輪も磨かないとねえ。あんたたち、やっておいておくれ。観客の目を眩ますくらいにするんだよ」ノウアは、せかせかと居間を出ていった。

アートウナとアリイアは、専用の薬液と布を持つてくると、椅子に座り、それぞれ膝の上で腕輪を磨きはじめた。

「さつき、逃げようとしていなかった？」

アリイアに言われ、アートウナは驚いた。どうやら、見抜かれていたらしい。アリイアは微笑した。

「別に責めていないわよ」

「ここでじっとしているのが耐えられないんだよ。主の舞はいいけど……」

準備は嫌なの。刻一刻と、魔導師へ近づいて行くような気がして。自分はその一員であると自覚させられる気がして。アートウナは声に出して言わなかったが、腕輪を磨く動作はおろそかになった。

「この腕輪、いつのもの？」アートウナは、話題をそらした。

「目覚めの戦いより前からあるはずよ。でも、戦時中は主の祭りをしなかったでしょうね。ノウアの方が詳しいと思うわ。……と言っても、ノウアはその頃まだ生まれていなかったけど」

アリイアは、同じところを完璧に磨いた。たたまれた布は、前へ後ろへと一定に動く。

アートウナは、腕輪をひっくり返した。しかし、薬液をつけすぎたせいで滑

つてしまい、床に落ちた。アートウナは尻を浮かし、抱き込むように拾った。

「ねえ、あなたも来年、踊り手候補になるけど……」

唐突に言われ、アートウナは抱えた腕輪が重く感じた。アリアは、その一瞬で確信したようだ。

「魔導師を降りたいのね、本気で」

アートウナは、ぐるっと腕輪全体をぬぐった。

「ノウアが昔、言ってたんだ。『あたしの師は、魔導師を降りちまったよ』って。それから思ったの。魔導師って、やめられる……」

「ノウアの師、オアーダは、ある魔法動物と戦った傷が原因で、魔力を操れなくなっただけ、やめたのよ」

アリアは、上から書き換えるように淡々と言った。

「確かに、魔導師をやめたのは事実だけど、魔導師を降りても、魔法の指導はしていたわ。私は小さかったからよく知らないけど……。それこそ、ノウアが生き証人よ」

「でも結局、オアーダはアスハリエイク国に行ったでしょ。で、残った魔導師たちは苦労した？ しなかったよね？ なぜなら、オアーダは、魔導師の補佐を仕事人の中から選んでいたから。そう、選んだ、選べたんだよ！ そうして彼は、国を渡っていったんだ！」

沈黙したアリアは、仕上げて腕輪全体を綺麗に拭いた。そして、お添えをするように、腕輪を卓上においた。

「まるで分かってないわね。あなたが抜けたら……」

「あたしがいなくても、アリアがいる！ ノウアだって、あたしのことなんか気にしないよ」

アリアの目が、ぎらりと輝いた。

「あなたねえっ……！ 国で三人しかいないのよ。それに、ノウアがいつまでも生きていると思ってるの？ 馬鹿。自分の都合で国を危うくしてるのが、どうしてわからないの？」

「あたしだって、好きで魔導師に生まれたわけじゃないよ！ 呪文を覚えさせられて、ぐちゃぐちゃの アウシザットゥ 実文字を書いて、食事は一人、使い魔はギャーギャー騒いで、あたしの言うことをちつとも聞かない。アベドを助けたとしても、彼らは変わり者を見る目で返してくる。あたしは、選べるなら普通の見習いになりたかったの！」

「普通の見習いなんて、なれないわよ！」

ごんつ、と音を立てて腕輪が落ちた。アリアが立ち上がった拍子に落ちたのだ。しかし、彼女はすぐに拾わなかった。

二人は、そのまま睨み合った。

アリアは、息を吸い、片手で腕輪を拾い上げた。

「……いまさしやうがないじゃない。そんなこと言ったって、何も変わらないし、意味ないのよ。魔力を持って生まれたの。それがあなたで、私。そこから逃げようとしても、あなたがあなたでなくなるだけよ。エイネーのためにも、魔導師でいて」

「……なれない」

「なって」

「なれない」

「なれ！」

「ならない！」

アリアの目は、恐ろしく燃え上がった。

「じゃあ、もういいわ」

彼女は居間を出ていった。不気味な静寂の中、アートのウナは、自分が吐く息を聞いていた。窓から入る祭りの拍子が、調子を狂わせる。

アートのウナは齒ぎしりした。耳鳴りがする。頭の中で、蜂のような不快な唸りが上がる。腕輪を投げ出し、彼女は部屋を出た。

「エラドルスっ！」

吹き抜けに向かって叫んだが、使い魔は見当たらない。アートのウナは舌打ちし、階段を降りた。

エラドルスは、外にいた。竜はそこで、轟音とともに、青白い炎を吐き出していた。



同日、クウォレンたちは朝食後、自然の村に着いた。玩具市が開かれるのだ。彼らは、残った小遣いをかき集め、最後にふさわしい面白いものを手に入れようとしていた。

クウォレンは、移動中、片時も仲間たちから離れなかった。そんなクウォレンを、リリだけが訝しんでいた。

「あんた、今日、距離が近い」

リリは彼に直接言ったが、クウォレンはへらへら笑うだけだった。

出店の吹き種（筒に入った種を吹き、的に当てて得点を競う）へ遊びに行った、クウォレン、チャルー、マウリンを見送りながら、リリとエネーリスは装飾店に向かった。

「彼、性格が変わったみたい」

リリは、金属片を曲げただけの簡素な指輪を手にとって言った。

「誰の話？」エネーリスは首をかしげた。

「クワーレンだよ。ずっと誰かにくつついてる」リリは指輪を商品棚へ戻した。

「これ、いいんじゃない？」エネーリスは、葉の飾りがついた髪留めを見つけた。「リリにぴったり。森生まれだもんね」

「もしかしたら、クワーレン、馬車に轢かれそうになった時に、おかしくなったのかも」リリは髪留めを眺め、雫型の宝玉がついている指輪をエネーリスに渡した。「じゃあ、エネーリスはこっち。海生まれだから」

「そういうことってあるらしいわ。怖いとき、反対に明るくなるの。気持ちを安定させるためだって聞いたことがある」指輪をはめたり外したりしながら、エネーリスは言った。

リリは、泡を吹いて倒れるクワーレンを思い出し、ぞっとした。彼は目をぐるぐるまわし、リリを見ていなかった。見つけることができなかった、と言わべきか。すぐそばにいるのに、クワーレンはリリが見えないかのようにだった。そして、そのあとの御者騒動。どうやら、クワーレンと果物屋の店主は、御者と馬を見たようだが、クワーレンのほうは、御者を見つけることに対し、怖いほど必死になっていた。まるで因縁でもあるように。そうでなければ、轢かれかけた馬車にわざわざ近づいていかないだろう。

「彼、いまごろいなかったかもしれない。そう考えると、あなたのしたことは偉大だわ」エネーリスも同じ場面を思い出していたようで、血の気のない顔で頷いた。

「ありがと。あたし、ほとんど記憶にないけどね」

記憶から消したいくらいだが。リリは思いながら、葉の髪留めを、今の髪留

めの上からつけてみた。「どう？」

「似合いすぎてる」

「これ、いくら？」

エネーリスは背伸びをし、髪留めについている値札を見た。

「500ミル……」

「わっ、ぜんぜん持ってない！」

二人は笑った。そこでふと、エネーリスがなにかを見つけた。銀の葉が連なつた腕輪だ。

「シルレイヤの葉だ」リリは言った。

「そうね」

エネーリスは身を強張らせ、腕輪をもとに戻した。

「エネーリス、シルレイヤの森によく行っていたよね。あんな暗いところの、なにがいいの？」

リリは気になって訊ねただけだった。しかし、エネーリスは過剰なほど素早く、「なんにも！」と言った。

リリの茶色の目は、エネーリスを、じっととらえた。

「なんにも？」

「ええと、なんにもないのは嘘。綺麗な川もあるし、知らない木の実もたくさんあって……」

「へー。じゃあ、今度、あたしも行きたい」

エネーリスは唾を飲みこんだ。竜人スエデンのことがよぎった。リリは笑う。そして、ああ、彼女に隠し事はできないのだと、いまさらながらエネーリスは気づいた。敏感だからこそクワレーンを助けられた、だが、ここでは鈍感でいてほしかった。

リリは、硬直しているエネルギーの肘をつついた。

「あんた、シルレイヤの森で探しているでしょ。なにか、もしくは誰かを」

クワーレンは、みごとに吹き種を的に当てた。景品は、赤毛のライライ鳥を模した凧だ。しかし、クワーレンは口を曲げた。

「凧なんて自分で作れるよ」

「だが、それはよくあがるよ」

背のない椅子に股を広げて座る店主は、片目をつむった。「つくりの人が作ったからな！」

チャルーとマウリンは、まだ吹き種で遊んでいた。

「俺、あれを手に入れるまで帰らないからな！」

チャルーが言ったのは、ゴズと呼ばれる海獣の歯の、小刀だった。それを貰うには、種を五つ、的に当てなくてはならない。

「買ったほうが早いでしょ」

景品がただの凧だったことにふてくされたクワーレンは、とげとげしい口調になった。

「馬鹿、クワーレン。それじゃあ、お前、なんのためにここにきたんだよ」

「あたしは豆犬のぬいぐるみをもらう！ にゃんまるのお友だちにするの！」

二人は的しか見ていなかった。彼らを置いていくことにし、クワーレンは来た道を取りながら、他の仲間たちを探した。駄菓子屋、戦闘玩具屋、人形屋、人形の服屋……。出店は木立ちの中で、集まったり離れていたりと、まるでキノコのように思い思いに建っている。その合間を、見習い服と見習い帽子をか

ぶった同じような子たちが、胞子のように行ったり来たりしていた。おまけに、守りの人や、保育部屋の小さな子どもたちもいる。

一軒ずつ覗いていたクワーレンは、だが、足を止めた。通りの右手の木の陰が、視界の隅から滲むように広がり、光を奪っていったのだ。クワーレンは叫びかけた。そして、駆けだした。

恐ろしいことに、闇はすぐさま追ってきた。やはり、ただの暗がりではなかったのだ。眩暈でもない。眠りのアベドだ。視界の中央に、まだ光が見える。それを頼りに、彼はアベドの集団をすり抜け、鞭打たれた馬のように走った。何人かが怒鳴ったが、クワーレンは止まらなかった。

吹き種の店を通り過ぎた。チャルーたちは、まだ種を飛ばしていた。クワーレンは、玩具市の端まで走った。脇道へそれ、雑木林を掻き分け、草陰で撒けることを祈る。

ようやく足を止めたとき、クワーレンは、海を臨む芝の斜面に出ていた。

紺碧の直線。日に照らされ、薄黄色に輝く浜辺。白い波の泡が岸を洗い、突き出る岩礁が、快晴の空へ牙を立てている。手前に広がる芝の微妙な濃淡が、海風によって表情を変えた。

クワーレンは、あたりを見渡した。眠りのアベドは来ていなかった。ようやくまともに目が見えるようになっていた。祭りの喧騒は遠く、自分の荒い呼吸音が波音と混ざりあう。その一定の律動は、風によって逆立つ髪を撫でるように、徐々にクワーレンの気持ちを落ち着かせていった。

海は、どこかすべてを肯定しているように見えた。自分の生まれ場所である海は、クワーレンの見てきたことを、すっかり理解しているようだ。アベドの誰一人として取り合わなかったことを、あの青い手を何度も寄せる海は、飲み込んでかわりに重荷を引き取ってやろうと誘っているようだった。

大気の静かな唸りが耳に届き始めた。腕に挟んでいた凧が、風に煽られ、ばたついた。

いまになって、体の奥底から震えが駆け上がってきた。

（……眠りのアベドがいた。眠りのアベドがいた。眠りのアベドがいた）

やはり、死んでいなかったのだ。そして、はっきりと自覚した。やつは本当に自分を追っている、と。

クワーレンは衝動的になって、凧を頭上に掲げた。海風が、凧もろとも、クワーレンを押し上げる。やつは、また追ってくるだろう。その前に、海岸まで逃げなければ。

クワーレンは駆けだし、風に乗った。そうして地面を蹴ると、宙へと飛び出した。

次の瞬間、足は再び地面を駆けていた。坂により足の回転は速くなり、彼はそのまま無様に転んだ。

すぐに恥が襲ってきた。

（馬鹿。凧で飛べるわけじゃないか！）

彼は慌てて立ち上がった。見習い帽子が転がっている。泥と草のついたそれを拾い上げると、クワーレンは近くに埋もれていた岩に腰かけた。真っ赤な凧は、傍らで静かにしていた。

このまま、自分も石になればいいと思った。そうすれば、なにかも終わる。石は怖さを感じないし、どんなに砕かれても、決して死なない。ピクランタがそう言っていた。

海風が、誘うように黒髪を乱す。海の底に来て話してごらん。全てを終わりにさせよう、と。

そこへ、一陣の風が押し寄せた。真っ赤な凧は舞い上がり、クワーレンの手

にある糸を引っ張った。



アトウナは怒りに身を任せ、エラドルスに乗った。猛々しい巨大竜の羽ばたきは、アトウナの憤怒と同調していた。

彼女は、なかば躍起になりながら、自然の村に進路を向けた。アベドの数よりも、木の数の方が多いと揶揄される自然の村では、商の村と違って、ゆったりウェイコレンを選べるだろうと踏んでのことだ。頭が砂糖のように溶けきってしまうまで、今日はウェイコレンをふんだんに食べてやろう。

自然の村近くの雑木林にエラドルスを着陸させると、アトウナは、鞍巾着を外すために指を鳴らした。外れたのは、ようやく五回目のことだった。

仕事人の村へ一人で来るのは、はじめてだった。これは、アトウナにとって最初の一人旅であり、かつ、家出だった。帰る気は、さらさらなかった。

村の広場へ続く通りに向かうと、屋台がぽつぽつと立っていた。朝早いからか、朝食を提供する店が多い。食べ物といい匂いが食欲を刺激する。『玩具市はこちら!』という看板が通り脇に立ち、その向こうから管楽器の独奏が聞こえた。

通りを歩くアベドは、ほとんどいなかった。アトウナは、心地よい静寂と清々しい空気に、しばし心洗われた。道端に座る老人と目が合った。鶯色の服を着た彼は、自然の人だろう。彼は手を広げ、アトウナに礼を示した。アトウナも、軽く挨拶をした。

一軒の食料品屋台で軽食を買うことにした。店主は、てかった頬と、よく広がる口を持っていた。彼は、アトウナを見ると、その口をぱっかり開けた。

「これはこれは、アルテナ様。本日は、おひとりで？」

「ええ、まあ。そう」

気取った返事に、自分でも嫌になった。急いで付け足す。「あの、ポウが欲しいの。あと、フラッカンも。置いてあります？」

「ええ、もちろん。この『ツバメ商店』は、選りすぐりの軽食がそろっていますよ。焼き立てのスチエート（黄色いウリ科の野菜。素焼きにして食べる）はいかがです？」

店主は太い腕を出し、前に並ぶ、湯気立つスチエートを示した。「チエーラムの畑で育ったものです。甘さはぴかいちですよ」

「じゃあ、それも一つ」

「ありがとうございます。お代は三百ミルでございます」

商の人は、挟む道具を使ってスチエートを持ち上げると、紙袋に入れ、後ろの棚からフラッカンの袋を、端の籠からポウを取った。彼はその間、手を休めることなく、アトウナに話しかけた。

「アトウナ様は自然の村のどちらに御用があるんですか？ え？ 楽しみに来ただけ？ そりゃあいい！ しかし、あなた様とお話できる日がくるとは思ってもみませんでしたよ。しかも、うちの商品を買っていただけるとは。帰ったら仲間に報告しなければなりません」

「あたしも、嬉しいわ」

アトウナは頷いた。匂いにつられたのか、足元にいたエラドルスが肩に登ってきた。アトウナは重みで体がかしぎ、反対側に体をそらした。

「どうぞ。よい祭りの日を」

商の人は、紙袋を丁寧^に差し出した。その一瞬、竜が引きちぎるように紙袋をひったくった。

「あ、ちよつと！」

追いかけてようとした刹那、誰かに服を引っ張られた。振り返ると、さつき目が合った老人がいた。

「あなた、アートウナ様じやろう？ なあ、ヨウスの畑の呪い、〈見えない死〉、あれはどうなったんですか？ わしはまだ見たことがないんだが、見ただけで気持ち悪くなるというじゃありませんか。まったく、いままでにない、とんでもない呪いだ。近頃は、もとの持ち主のイエリオットが、なんか怪しいという話ですよ。もちろん、彼は山犬にやられて亡くなっていますが。けど、やっぱりイエリオットが呪いの原因を持ち込んだんじゃないかってねえ……」

老人はだらだら話し続ける。アートウナは、エラドルスを見失わないようにしながら、できるだけ丁寧に答えようと努めた。

「……えつと、イエリオットのことは気の毒でした。でも、〈見えない死〉が起こった原因は……」

アートウナは、^{モウベイヤ}深の術と言いかけたが、危うく飲みこんだ。この話は、混乱を起こしかねないとして、長の会の間でのみ扱われる機密事項だった。アートウナは、なんとか取り繕った。

「……原因は、まだわかっていないんです。ノウアとアリアは、新たに解決策を生み出そうと、奮闘中^{です}」

「ええ、ありがたいことですよ。精製炎は、原料の^{ナツクイカ}灯火蟬が足りていないのでしょう？ それで、新たな解呪方法とは、どのようなものなんです？」

アートウナは、^{アーナラミ}秘庭書庫のことも避けながら、考えをめぐらせた。

「師は、過去の記録をもとに、現在の〈見えない死〉の解決を急いでいます。アリイアも、被害地に行つて、解析を進めてます。また、第一・第二魔法動物の対応を薬の人が担っており、みなさんの協力もあつて、たいへん負担が減っています。これは是非、続けていつてほしいのです」

老人は、うんうんと頷いた。魔導師からの「協力してほしい」という言葉は、従えば見返りが来るというように、彼の首は無意識に縦に動いた。

「しかし、はやく解決することを願うばかりですよ。あの呪いが自然の村全土に広がったら……いや、エイネー中に広がったら、商売どころか、飢餓が訪れます！ 獣の村や、学舎にも〈見えない死〉が出たというじゃありませんか。わしはとても……とても不安です」

「ええ。ですが、きつと解決策を見つけます。影の人も、エイネーを簡単には見放さないでしょう」

アートウナは、もう遠くに行きすぎて蠅くらいになったエラドルスを、視界の隅でとらえた。

「では、これで、その、失礼します。……いい祭りの日を」

逃げるように立ち去り、アートウナはエラドルスを追いかけた。自分の口から出た言葉が胡散臭すぎて吐き気がする。老人は、まだアートウナのことを見ている。先程の商の人と、ぶつぶつ話している。

「アートウナ様にまじないをかけてもらえばよかったよ。そうすれば、少しは安心なんだが……」

商の人は笑った。

「いや、あの方は使い魔を追っかけるのにお忙しいよ。アリイア様のようにするにはまだまだお若い。姿を拝めただけでも光栄なことだ」

アートウナは、むつつり口を結んだ。エラドルスは、近くの森へ滑るように

入っていき、姿をくらました。

商の人の言葉は、アートルナを怏った。アリアアが素晴らしい魔導師だということを知っている。冷静で賢く、魔法も強力、踊りも完璧。確実で丁寧、くわえて器量もいいときたものだから、何やつてもがさつで気分屋、ぼさぼさ頭のさぼり魔である自分としては、お手上げだ。

靴先で地面を掘るように歩いていると、窺うようにして、エラドルスが降りてきた。紙袋を、主人の腰に押し当ててねだる。アートルナはフーラツカンをとりだし、宙に投げた。エラドルスはうまく空中で捕え、カスをまき散らしながら咀嚼した。

普通の獣と使い魔は異なる、と、ノウアはアートルナに教えたことがあった。エラドルスと違って、他の竜が動物の肉を食べることを、アートルナが初めて知った時だ。エラドルスは菓子と虫を好むので、アートルナはそれまで、竜はみなそうだと思っていたのだ。

使い魔は、魔導師と一生をとにもする存在だった。魔導師が生まれて一年後、影の地にて使い魔を授かる。幼い頃のことなので、アートルナはエラドルスとの出会いを詳しく覚えていないが、付添人として立ち会ったノウアは、いくつか教えてくれた。影の地では、炎が赤々と燃やされていたこと。アートルナは自らそこへ飛び込んだこと。転がるようにしてもどつてきたときには、竜を抱えていたこと。そして使い魔の名前を述べたことを。

アウシエヌムン

エラドルスは、青白い炎の中心部、もっとも高温になる部分を指す実言葉だ。だが、彼は高温すぎた。若い暴君は、近づきがたかった。主人のアートルナも理解できないことが数多くあった。それが、菓子を食べることであり、呆れるほどの落着きのなさだった。

エラドルスは、木から木へと飛び移り、鳥を追いかけている。時折、アートル

ウナの頭にばらばらと枝が落ちてきた。手のかかる使い魔を恥と思わないのは、こういった誰もいない時だけだった。

日が昇ってきた。葉の隙間から、陽光が矢のように差し込む。いつしか出口に来ていたようで、幹の合間に濃い青色の水平線が見えた。

「海だ……」

森の外は、芝の斜面が広がっていた。緩やかに浜辺へと続いている。風が潮のにおいを運んできた。音楽も聞こえた。浜でタコ釣り大会をしているのかもしれない。飛んでいたエラドルスの影が、黒い三日月のようになって芝を流れた。

しかし、三日月は突如翻った。アートのウナの背中に衝撃が走り、彼女は前へ倒れた。背中にエラドルスが飛び乗って叫んでいる。警告の声だ。しかし、重さと肩に爪が食い込む痛みで、顔が上がりず、何が起きているのかわからなかった。

「エラドルス、どい、て！」

体を反転させ、どうにか竜をどかすと、アートのウナは四つん這いのまま空を見上げた。

そこには、真っ赤な鳥がいた。平たく、まるで紙切れのようだ。円形の目玉はこちらを凝視している。くるくると不安定な飛行を見せ、羽ばたきをいっさいしない。

「あれ、なに？」

エラドルスは、情けなくぎゅうぎゅう鳴いて、主人のまわりをせわしなく駆けた。ふと、アートのウナは、隠れた魔導師のことを思い出した。もしかしたら、飛行する魔道具を使い、エイネーを監視しているのかもしれない。アスハリエティク国では、飛行する紙を使った文通がされていると、ノウアから聞いたこ

とがある。文通相手のハクウガシは、いつも飛ぶ紙の鳥で返事をよこすのだと。これも、その類だとしたら？ 彼女は、腰を低くしたまま、斜面をすすんだ。

首を伸ばすと、下の方に、岩に腰掛ける見習いがいた。見習い帽子は放っており、黒髪が海風に揺れている。彼は、赤い鳥を眺めていた。

アートウナは、はっとした。赤い鳥は糸で操られていた。その糸は、少年が持っているようだった。

とたん、竜の雄叫びがあたりをつんざき、青い影がアートウナの横をかすめた。彼女が引き留める間もなく、エラドルスは、赤い鳥に向かって矢のごとく飛んでいった。

「エラドルスっ！」

アートウナが叫ぶと、少年が振り返った。彼は、迫ってくる竜に目を見開いた。エラドルスは急上昇すると、鳥に向かって炎を吐いた。青白い光と強い熱が降り注ぎ、アートウナは腕で顔をかばった。下で少年が喚いている。見れば、燃えさしが少年へと降り注いでいた。アートウナは、慌てて斜面を降りたが、芝は滑りやすく、尻もちをついた。彼女は転がるようにして少年のもとへ向かい、二人は悲鳴を上げながら、落ちてくる火と焦げの塊を払ってよけた。

赤い鳥はすっかり消えた。空の脅威はエラドルスだけになった。燃えた紙の匂いが充満していることに息を吸ってようやく気づいたとき、少年が叫び声をあげた。

「ぎゃあ、わあ！」

少年が引き寄せた糸の切れ端に、まだ火が付いていた。二人は叫び、放った糸切れに草と土をかけ、最後に少年が踏みつけて鎮火させた。

事が収まると、彼は、興奮して竜を指さし、言った。

「ねえ、本物の竜だよ！」

しかし、相手がアトウナだと気づいた瞬間、彼は飛び上がって、三步下がった。「ま、魔導師様……」

彼は頭に手をやり、見習い帽子を被っていないことに気づくと、急いで草むらから探し出した。

「ご無礼をお許してください。見習いの仲間だと思って、つい」彼はぎこちなく腕を広げ、魔導師に対する礼を示した。

「それはあたしの方。巻き込んでごめんなさい」

アトウナは言いながら、口角が上がるのをとめられなかった。いま、彼、見習いの仲間だと思った、って言った？

一瞬、あたりが暗くなった。竜が上を通り過ぎたのだ。二人は、鮮やかな青い竜を見上げた。エラドルスは、満足したかのように、雄たけびを上げて旋回している。

「怪我は？」アトウナは訊ねた。

「なんともありません。……あれは、アトウナ様の竜ですか？」

「うーん……そう。エラドルスって名前。使い魔なの」

「使い魔……」少年は、味わうようにゆっくり言った。

「さっきの鳥は、あなたの？」

アトウナはわずかに警戒した。もし隠れた魔導師だったら？　こんなに若いのは、見習いに扮しているのは、周囲をだますためかもしれない。

しかし、少年はぽかんと口を開けた。

「鳥？　ああ、凧ですか。そうです、今日、景品でもらったんです」

「凧？」今度はアトウナがぽかんとする番だった。「凧ってなに？」

少年は驚いた。「……知らないの？」

「知らない。なんなの、それ？」

少年は窮した。それから、身振り手振りで説明した。

「木で作った骨組みに、紙を張って、風の力で浮かすのが、凧です。それを使って遊ぶのが、凧あげ。さっきの鳥は糸でつながっていて、それで高さを調節したりするんです」彼は腕を動かし、凧あげをするふりをした。

「へえ、はじめて知ったわ……」

「僕も、魔導師様が凧あげしないって、はじめて知りました。みんな遊ぶものだ……」

「ということは、エラドルスはあなたの凧を壊したってことね。弁償するわ」アトウナは、エラドルスを睨み上げた。

「いや、別にいいんです。思い入れがあったわけじゃないし。自分でも作れるもん」

「でも、いつか埋め合わせをするわよ。あたしの使い魔のせいだから」

「あなたの使い魔はかっこいいですよ。会えてすごく嬉しい」

はじめて言われ、アトウナは眉をひそめた。少年は、羨望のまなざしでエラドルスを見上げている。

「竜が好きなの？」

少年の顔は、そのときわずかに曇った。

「生きていれば。骨は好きじゃありません。アトウナ様は、それ、どうしちやったんですか？」

少年は、ずっと気になっていたのか、控えめにアトウナの服の裾を指した。わき腹に大きな染みができていた。甘い香り……スチエートの汁だ。紙袋もぐちやぐちやになっている。エラドルスが乗っかってきた時、下敷きにしてしまったのだ。

「いろいろ、あって……」

少年は、少し笑った。アートウナは、ますます茂みに隠れたい気分だった。そこへ、エラドルスが落ち葉のように舞い降りてきた。少年は、跳ねて後退した。アートウナは、ほっとした。

エラドルスは、翼を丁寧に折りたたみ、主人のそばに着地した。水晶のような目玉を、少年にじっと向ける。

「もしよかったら、触ってみる？」アートウナは、ふと言った。

「え、いいんですか？」少年は身を固くした。

アートウナは、肩をすくめた。

「あなたの風を壊しちゃったし。エラドルスも、あなたを大丈夫だと思っているみたいだから……、いいよ」

いつも喚きちらすエラドルスは、今回ばかりは行儀が良かった。首の後ろの鶏冠を美しく立たせ、青色の鱗の輝きをあたり一面に煌めかせている。竜は、硬い爪の生えた両手をそろえ、瞬膜を横に閉じながら、少年の動作、一瞬一瞬を観察した。

少年の手が、竜の尖った鼻面に近づいた。エラドルスは、鼻腔を膨らませ、彼の手に触れた。

「わあ。まるで……、やすりみたいだ」

彼は、静かに笑みを浮かべた。が、すぐに手をもとに戻した。顔に翳が差していた。

「どうかした？」アートウナは訊ねた。

「あの……僕……」

少年は迷いを浮かべた。少年の黒い瞳には、果てしない悲愴が浮かんでいた。そういえば、なぜ一人で風あげをしていたのだろう。アートウナは気づき、様々な憶測をした。

少年は、言葉を口の中で噛むようにしながら、一度後ろを振り返ったあと、ようやく言った。

「僕、ずっと前から、眠りのアベドっていう、光を奪うアベドに会うんです。そいつらを見ると、とたんに視界が奪われる。やつら、僕を追っているみたいで。数日前は、商の村で、僕を馬車で轢こうとしました。さっきは、玩具市で追いかけてきた。アートルナ様は、見たことがありますか？ その……眠りのアベドを」

少年の声は聞き取りづらかった。言葉を発しながら、同時に飲み込んでいるような感じだ。ところどころ海風の唸りにかき消されていたが、それも望んでのこのように思えた。アートルナは、少年がどこかへ消えようとしているのを感じた。絞り出した言葉は、少年を傷つけているようだった。

「見たことは、ないけど」アートルナは、慎重に言葉を選んだ。「あなたは、そいつになにかをしたわけではなくて、向こうから一方的に敵意をむけられているっていうこと？」

「わからない。そうみたい」

少年は血の気がなく、いまにも倒れそうだった。アートルナは、岩に腰掛け、少年にも勧めた。少年は、一つ間を開けて、隣に座った。

「眠りのアベド……。それは、アベドの姿かたちをしているから、そう呼んでいるの？ 魔法動物なのかもしれないけれど、あたしからはなんとも言えないな。ノウアのほうが詳しいと思う」

アートルナは、立てた膝に腕を乗せ、あごを掻いた。少年がたびたび見せる翳りのもとはこれなのだろうか、と思った。少年を横目で見ると、足の間で組んだ指先が震えていた。

「……アベドのように見えるんです。ちょうど、背丈は大人アベドくらいで。

あれが魔法動物なら、すごく気色悪い」

アートウナは想像してみた。アリイアくらいの影をもった魔法動物を。そいつが、視界を奪って追いかけてくるのだ。彼女は身震いした。

「ノウアにこのことを話していい？ あたし、詳しいことを聞いてみるわ」とたん、少年は驚いたように飛び跳ねた。

「ほ、本当ですか。……信じてくださる、と？」

「うん。この問題は、ちゃんと解決しないとだめだよ。それに、風を壊した借りがあるからね」

アートウナは肩をすくめた。少年は、身を震わせていた。

「……ありがとうございます」

その時、背後で声がした。振り返ると、斜面を登ったところに金髪の見習いがいた。後ろにも何人かいる。

「クワーレン、探したぞ！」金髪の少年が叫んだ。

「いま行く！」少年は、鼻をこすって答えた。

アートウナは耳を疑った。

「……クワーレン？」

「アートウナ様、僕、手紙を送ってもいいですか。そこで詳しい話を全部、お話できればと思います」クワーレンは言った。

「え、ああ、うん。わかった……」アートウナはそれどころではなく、空返事になった。

クワーレンは、アートウナの足元にいるエラドルスを一度見ると、仲間のもとへ駆けだした。合流した見習いたちは、少年の肩を叩き、アートウナを振り返って礼を示してから、もと来た方へ戻っていった。「あれって、アートウナ様？」一人の見習いが言う。クワーレンがどう答えたかは、遠くになって聞こ

えなかった。

アートウナは、一人、取り残された。速まった鼓動が抑えられない。

（彼は、なぜアケラスの使い魔の愛称を、見習いの式でもらえたのだろうか）

アートウナは、少年の名前を知って怖くなった。魔導師アケラスの使い魔、クワルガールドは、白い巨竜として知られており、デイゴンネーからエイネーへ、それからエイネーの発展へと、アケラスとともに歩んだ使い魔だった。その名の由来は、依然判明されておらず、アケラスの造語ではないかと、魔導師や、魔法学、言語学の師の人など、研究者らの間では言われていた。

魔導師の初代長で、魔導師の木を建設し、つながりの扉をつくったアベド、魔導師アケラス。そんな彼が生み出した「クワルガールド」は、なんらかの呪文ではないか、という説もあった。この説は否定の証拠もないため、現在、この名前は、有識者の間では安易に口に出すことを恐れられていた。

「クワーレン」とは、そんな「クワルガールド」の愛称だった。使い魔を愛称で呼ぶ魔導師はほとんどいない。本来の名前は自らの奥底から引き出したもので、それを變形させることは、自分の骨を折るようなものだった。それでも愛称で呼んだのは、クワルガールドの本来の意味を隠したかったからではないかと、一部の研究者は踏んでいた。

しかし、その愛称を、なぜあの少年は見習いの式で授かったのだろう。アートウナは、少年の鴉のような髪や、潤んだ大きな黒い瞳を思い出して、鳥肌が立った。

彼と魔導師の間には、なにか関係があるのだろうか。アートウナは、彼の秘め事は、それを解くための鍵なのではと考え始めた。

そこで彼女は、ある期待を抱いた。

「エラドルス、もしかしたら、あたしたち、できるかもしれない」

アトウナは顔を上げた。紫の目が太陽の光を拾い、力強く輝く。風に乗るエアドルスの三角の翼は、まるで風のようなだった。アトウナは、使い魔と共に駆け出した。

もしクワレンと魔導師の関係性を明らかにしたら、そこにつながりを見いだせたら、彼は魔導師の代役になれるかもしれない、彼女はそう考え始めていた。